

## 第 11 回(2009. 3. 11 配信)

## 雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「3 月は蛍の光、窓の雪」

3 月は卒業式が行われる。むかしは卒業式で『蛍の光』を歌ったものである。歌というものは専門の歌手に歌わせて聞くものであり、素人が人前で歌うものではなく、ましてや酒の力を借りてパーティーやカラオケなるもので蛮声を張り上げるなど言語道断である、と子供のころから固い信念を持っている雲竹齋先生のような者を除けば、現在の大人のほとんどが歌った経験があるにちがいない。

『蛍の光』の歌は、スコットランド民謡の翻訳唱歌である。明治 14 年(1881)に尋常小学校唱歌となった。この「蛍の光、窓の雪」という歌詞は、「蛍雪の功」という中国の故事に由来している。晋の国の車胤(しゃいん)という人は、家が貧しくて明かりを灯す油が買えなかった。そこで、蛍を捕ってきて、その光で勉強した。また、孫康(そんこう)という人は、雪の明かりで本を読んで勉強し、共に偉い人になったという。日本の飛鳥時代の話である。

蛍の光で、はたして本が読めるのだろうか、という疑問をもつ人が多いらしく、試した人もいるらしい。その人によると 2000 匹の蛍を集めてようやく本が読めたという。しかし、2000 匹は多すぎる。古代中国では、ものすごく大きな蛍がいて、20 匹で本が読めるといった、いかにも見てきたようなことをいう人もいる。昔の人は現代人よりも視力が良かったことは確かだが、蛍の発光は連続ではなく点滅する。それもバラバラではなく、不思議なことに一斉に揃って点滅するから、真っ暗になる瞬間がある。こんなチラチラした明かりの状態で本を読んだら、目が悪くなって勉強どころではなくなるに違いない。

昔はどこでも蛍が見られたものだが、戦後の化学肥料や消毒薬の大量散布が影響して絶滅寸前になってしまった。現在では多くの市町村で人工的に飼育して保護活動をしているが、土地開発が急速に進んでしまった現在では、もう昔のような自然の野原には戻らないだろうから、いくら頑張ってもたくさんの蛍が飛ぶような状態にはならない。

蛍の仲間は、世界中で 2000 種ほどいるが、日本では 40 種くらいいる。ゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルなどが、私たちによく知られている。蛍は、一生陸上ですごし、幼虫時代は主として蝸牛(カタツムリ)の仲間を食べて成虫になる。しかし、ゲンジボタルやヘイケボタルは、幼虫時代を淡水の中で過ごし、淡水の巻貝を食べて成長する、世界でも非常に珍しい蛍である。

関東に多くみられるゲンジボタルは、体長 1.5 cm くらいで、幼虫時代は河川(流水)のカワニナと呼ばれる淡水の巻貝を餌にしている。これに対し、西日本に多くみられるヘイケボタルはゲンジボタルの半分くらいの大きさだが、水田や溝などの止水でカワニナのほかにモノアラガイ、タニなど淡水巻貝を餌にして幼虫時代を過ごす。どちらも、成虫のお尻の 1 節(雌は 2 節)に発光器を持ち、ゲンジボタルは 1 分間に約 20 回、ヘイケボタルは数十回も点滅させる。ちなみに、蛍は夏の風物詩となっているが、秋や冬に発光する蛍がいることはあまり知られていない。

蛍は、分類学上「昆虫」である。一般的に足が 6 本ある成虫を昆虫と呼ぶ。したがって、たとえば蜘蛛などは足が 8 本だから昆虫の仲間ではない。雲竹齋先生の専門は昆虫類の「解剖生理生態学」だったから、こういうことには詳しい。昆虫の多くは変態する。すなわち卵から幼虫、蛹、成虫に変わるが、これを完全変態と呼ぶ。蛹にならないで幼虫からいきなり成虫になるなどは不完全変態というが、だからといって、エッチの語源となった「変態(HENTAI)」とは、性的に変な態度をとる諸君のことであって、昆虫の変態からきているのではない。蛍の点滅は交尾する相手を求めている合図だといわれている。交尾をしたい！交尾をしたい！といって、相手を血まなこになって追いかけている蛍を、情緒があるとかなんとかいって眺めている諸君こそ、まさに「HENTAI = 変態」なの

である。

孫康は雪の明かりで本を読んで勉強したというが、この雪明かりは、雪が白いから光が反射して周囲を明るくさせるので、雪が白いのは可視光線を吸収しないからである。氷河などの割れ目の中が緑色に光っているように見える現象を、テレビなどの映像で見たことがあると思うが、これは光の屈折によって起きる現象である。いずれにしても、これらは光が反射、屈折によって起きる現象だから、全く光のない所では無理というものである。したがって、「雪明かり」とは月の光線が反射して明るく見えるということだろうが、窓に積もった雪の間接的な明かりよりも、月の直接光線の方がより効果的ではないだろうか、などと余計なことをいう人がいる。格言やことわざに科学的な根拠を持ち出して文句をつけてどうする。夢がなくなるではないか。

雪は白いから、雑多なものを隠してくれるので、一見きれいである。雪化粧などという言葉があるように、あまり雪に接しない地方の人は雪を美しいものとしてとらえるが、豪雪地帯の人にとってこれほど迷惑なものはない。毎年、必ずどこかで家がつぶれる被害が出る。つぶれないように屋根に登って雪下ろしをしなければならぬが、足を滑らせて大怪我をしたり亡くなったりしている。雪が降って喜ぶのは犬くらいなものだが、豪雪地帯では犬だって喜ばない。今年は雪が多いからスキーには絶好だ、などといっている人でもいない者がいる。豪雪地帯の人が聞いたら張りっ倒したくなるに違いない。雪の被害のない地方の人が、雪国でスキーをしたかったら、民家の雪かきや屋根の雪下ろしなどを手伝ってからにしろ！スキー場の経営者も同罪だ。ちなみに、この雲竹斎先生はスキーの名手である。残念ながらもう体がいうことをきかないから、名手だった、というべきか。郷里である信州の中学・高校では冬はスキー、夏はアルプス登山が必修科目だったからでもある。

雪国の小学校では、雪の結晶の形を調べる実験がある。雲の中の小さな氷粒が、まわりの水蒸気を取り込んで成長し、結晶になって落ちてくる。氷の結晶はなぜか六角形で、まったく同じものはないが、大きく分けて角板型と角柱型に分類され、角板の仲間に写真でよく見るきれいな樹枝型などがある。また、角柱型には砲弾や針の形をしたものなどがあるが、これらは水蒸気量と気温が関係して微妙に変化してできる。ガラスの板の上に降ってくる雪を受けてルーペで見るとよくわかる。雪国に行ってもスキーなんぞしないで、こういったことを子供に学ばせるべきである。ちなみに、高いところで降る雪はサラサラの粉雪で、結晶が一つ一つはっきり見えるが、標高の低いところでは気温が上空より高いから、降ってくる間に結晶がくっつきやすくなり、「牡丹雪」になってしまい、あまりはっきりしない。

なお、雪の結晶がくっつき合ったものが「雪片」で、結晶に水滴が付いて次々と凍り付くと「霰(あられ)」になる。この霰が直径 5 mm 以上になると「雹(ひょう)」という。また、雨に雪が混じって降る現象を「霰(みぞれ)」というが、霰自体が雨と雪のことだから、霰雪とか霰雨という言葉は、雨雪雪とか雨雪雨という意味になる。気取って歌の文句に使ったり口にしたりする人がいる。「むかしの武士のさむらいが、長い刃の長刀で」などといっているようなものだから笑ってしまう。気をつけよう。